

和菓子屋の里山づくり —美しい日本の自然の回復・再生の拠点として—

株式会社 叶匠寿庵・自然再生士・樹木医 丹沢 愛継

キーワード：里山、野草、薪炭林、林相転換

はじめに

滋賀県大津市のほぼ南端、山間に農家が点在する大石龍門地区の小高い丘陵地に和菓子屋 叶匠寿庵^{かのうしょうじゅあん}の営む 63,000 坪の里山「寿長生の郷」^{すな い さと}はある。開設は 1985 年、今からちょうど 30 年前。当時大津市内の一角に本社と工場を構えていた叶匠寿庵が、農工一体の和菓子づくりを実現させるためこの地に梅の苗木 1,000 本を植えたことに始まる。

言うまでもなく和菓子は日本の自然とは切り離せないもの、これなしには生まれてこなかったものだ。その原点にかえり、自然の息づきや時の移ろいを肌で感じながら感動を生む和菓子をつくりたい。当時の社長、芝田清邦の強い思いが設立の根底にある。

1 寿長生の郷の概要

関西一の里山づくり。これが当初より掲げた開発テーマであったが、もとよりここは人の暮らす里山だった。数戸の民家とため池があり、平地は畑や水田、山は薪炭林と柴山として利用されていた。それらに付随する水路、里道、井戸、シシ垣。そうした先人の痕跡を生かしながら寿長生の郷はつくられていった。

敷地中央には外部に瓦屋根だけを覗かせて社屋と菓子工場が構える。叶匠寿庵のお菓子はすべてここで作られ、北海道から九州まで、全国の店舗へと毎日旅立っていく。その一段高い場所には茶室や食事処など、お客様を迎える建屋が並ぶ。

山裾の北側には梅林が広がり、南側の山裾から平地にかけては野草の庭「野の花観音径」(写真 1)、柚子畑、山羊の暮らす農園が連なる。その間に建つ炭焼き窯は冬になると白い煙を上げ、茶室と囲炉裏に用いる一年分

の炭を焼き上げる。

大小さまざまな池はモリアオガエルの繁殖地、イチモンジタナゴの池、蓮池などとなっており、大きな池の中島はカルガモの営巣地だ。これらの池を満たし流れる水は工場排水を浄化したもので、6月の夕暮れにはホタルも舞う。さらに伐採木を用いたシイタケ栽培、地元小学生と稲作に取り組む水田など、すべて紹介するときりがないが、私たち従業員はこれらを親しみを込めて「郷」と呼ぶ。

2 野の花観音径／野草の庭

「花は親しい仏さま」創業者芝田清次の言葉を引いてつくられた「野の花観音径」は日本の野草に出会える庭園だ。

旧薪炭林 4,000m² に密生していたコナラやアカマツを択伐して小道と流れを巡らせ、モミジやツバキなどを補植した。人の手が入ることでもともと自生していたササユリ、チゴユリ、コバギボウシなどは再び元気に花を



写真1 初夏の野の花観音径

咲かせた。そこへさらに社員がミスミソウやイワカガミ、ミズバショウなどを植え育てていった。補植する野草は国内の自生種とし、地域性や遺伝子系統にはこだわっていない。この土地で無理なく持続的に生育できるものであれば今後も取り入れていく方針だ。

こうして現在、ゲンノショウコやイヌタデなどを含めると300種以上の野草の花が見られるようになり、お客様は案内マップを手に花を訪ねて散策される。

この草本群の維持には夏と秋、年2回の草刈りが欠かせない。特に夏の選択的手刈りでは刈る草と残す草を識別するのに大変な手間がかかり、夏場はほぼこの作業に費やされる。一方、この草刈りさえすれば野草たちは自ら種や根系で増え広がってもくれる。極言すれば草刈り次第の庭とも言える。

当初は鑑賞が主な目的だったこうした野草の育成は、30年を経て新たな意味を持ち始めている。

いま日本全国の山々では深山、国立公園などの保護林、二次林を問わず、シカの食害による植生の破壊・消失が急速に進んでいる。何年か前に見た花の群生が今年にはもう見られないという状況が各地で頻発している。また、人の生活スタイルや環境の変化によりキキョウやナデシコといったごく身近な野草さえ、絶滅危惧種に挙げられるようになってきている。

古来より日本人が親しみ文化の礎としてきた日本の自然を守り育て次代に渡すのは今を生きる私たちの責務であり、この庭にはそうした役割もあると考えている。

3 山の整備

(1) 植生目標

2000年、庭園や施設まわりの緑地整備が進む一方で、背後の山は手付かずのままだった。叶匠寿庵は、森林生態学者で「自然配植技術」という緑化技術を提唱されている高田研一先生を顧問に迎えた。これは土質・土地形状・気候といった現場の自然条件と、その緑地に求められる機能・役割といった社会的条件を見極めた上で樹種を選定し、樹木の成長スピード・遷移を想定して配置・植栽するというものだ。

山は荒れていた。山腹では大きくなったコナラやコジ

イの下にサカキやヒサカキなどがせめぎ合い、枯れた木の残骸で前に進むのも困難だった。尾根筋では、林立していたアカマツがマツ枯れの最盛期を迎えるとともに、かつて柴山として管理され群生していたコバノミツバツツジが、ソヨゴやヒノキに埋もれ細々と生き延びている状態だった。薪炭林としては利用しづらかったであろう急勾配の斜面は、ヒノキとコジイが独占し始めており、林内は極めて限られた樹種で構成されていた。

そうした植生の現況や地形などから土壌の発達を予測し、郷の将来を思い描きながら目標とする植生を探る。

尾根筋はやはり関西の里山の春の象徴であったコバノミツバツツジを復活させよう。比較的緩やかな山腹は既存のヤマザクラを生かし桜山にしよう。急峻な谷あい

の斜面はコジイを皆伐し、ヒノキを一部残しながらモミジの谷にしていこう。方針は定まり山の整備が始まった。

数名の担当者による施業はゆっくりと一歩ずつ、段階を踏んで進められた。

現在、桜山に植えた70本余りのヤマザクラの苗木は、植栽から約10年を経て自生のアズキナシやタカノツメらの中で林冠に達しつつある。5年前から本格的に高木の除伐を始めた尾根では再びコバノミツバツツジが春の山をピンクに染めるようになった(写真2)。昨冬から着手したモミジの谷ではイロハモミジを中心にウリカエデ、コミネカエデ、イタヤカエデなどのモミジ類や、イヌブナ、ヤマボウシの小さい苗が育つ。



写真2 再生しはじめたコバノミツバツツジの尾根

(2) 山の展望ルート

3年前には山を一巡できる散策路「山の展望ルート」を開通させた。山頂からの見晴らしがよく、周囲の山々やふもとの集落を一望できるこの道は、徐々にお客様に利用されるようになってきている。今はまだ眺望がメインだが、道程の美しい樹林景観も提供できるよう整備を続けていく計画だ(写真3)。

4 大きな自然の中で

十年一昔といわれるとおり、郷をとりまく自然環境もこの10年で大きく変わった。なかでも特に問題なのが、先にもふれたシカの食害とナラ枯れだ。

シカは10年前から劇的に増えだした。一時はメスの群れとオスジカが隣接する山林をまたにかけて棲みつき、植栽する樹木・草本をことごとく食べていった。私たちごっこのような対策が始まり、現在、敷地最外周にはフェンスを、その内側、平地や緩斜面の範囲を囲むようにネットを、さらに畑や苗木にはそれぞれ個々に防護ネットを張り、日々扉の開閉管理を行っている。

ナラ枯れは5年前、野の花観音径を中心に発生し、これまで200本以上のコナラがカシノナガキクイムシの攻撃を受け、うち150本を伐採した。胸高直径40cm、50cm級の木々の伐採の衝撃は下層木や林床を痛め、生じるギャップからの直射光はフクジュソウやヒトリシズカなど木陰の植物を衰退・消失させる。

しかし、こうした被害と捉えられる問題も、元は人と

自然の関わりの変化に起因する。こうなってはじめて自然の大きな息づきや抗えない真理、自分のいる位置に気づかされる。私たちは置かれたその場で次の時代への意思と願いを持ちながら善処していくしかない。シカに対しては間断のない防除の継続を、ナラ枯れに関しては放置された薪炭林の当然の結果として枯損を受け入れ、本来地域に根ざした多様な樹種による林相転換を図っていこうと思っている。

5 これからの課題

現代における里山は、「知」「安らぎ」そして「創造」の場だと考える。自然ほどクリエイティブなものはない。そこから発想しモノをつくる、そのモノをつくる人が育つ。

現在、寿長生の郷では、山での伐採や植樹を従業員やお客様にも参加してもらい取組を始めている。見て、触れ、考え、工夫できる楽しいものにしたい(写真4)。

また、今ある自然を貴重な郷の資源として捉え、確実に次世代へ受け渡していくためには、正確な生物調査とデータ整理が不可欠であり、大切な課題だ。

この里山が多くの歓びを生みながら未来へと引き継がれていくよう、将来においても価値ある緑づくりに努めていきたい。

<プロフィール>

1973年京都市生まれ。2005年(株)叶匠寿庵入社。寿長生の郷・野の花担当。



写真3 山頂より郷、集落、山々を望む



写真4 植樹風景／お客様、従業員と共に